



書名：花もて語れ (1～13)

著者：片山ユキヲ

朗読協力・朗読原案：東百道

出版社：小学館

出版年月：2010年10月～2014年10月

推薦者

余郷裕次

鳴門教育大学大学院教授

言語系コース (国語)

～朗読が教師力を高める！～

私は「初等国語科教育論」などの授業で、音読を用いた教材文へのアプローチを行っている。「読めたとはいあるイメージが持てた状態のことである。イメージが持てると、子どもの目が動き体が動く」という具合である。

ある時学生が、「先生がおっしゃっているようなことが、『花もて語れ』というマンガに出てきます。」と知らせてくれた。マンガと聞いて、あまりマンガを読まない私は、聞き流してしまっていた。しかし、その後、他の数人の学生からも同様のことを聞かされ、無視できなくなった。

『花もて語れ』は、交通事故で両親を亡くした少女、佐倉ハナの7歳から29歳までの成長物語である。その成長物語は、佐倉ハナが持っている天性とも言うべき朗読の才能が、発掘され磨かれ開花するという過程とともに展開している。主人公佐倉ハナが通う朗読教室の藤色きなり先生は、佐倉ハナを次のように評する。

「佐倉さんが、朗読にとって“イメージ”が大事だということを、無意識にわかっているからです。」(①p.107)

佐倉ハナが、様々な作品の朗読と格闘しながら乗り越えていく朗読のステップをまとめると次のような6段階になる。

- ステップ1：「朗読はイメージに始まり、イメージに終わる」(読み手のイメージ) こと
の理解＝「やまなし」(宮澤賢治)
- ステップ2：「セリフの読み方」＝「花さき山」(齊籐隆介)
- ステップ3：「地の文の読み方」＝「トロッコ」(芥川龍之介)
- ステップ4：立体的な「場面イメージ」を聴き手に伝えること＝「注文の多い料理店」
(宮澤賢治)
- ステップ5：「舞台上で作品を読み味わうこと。その場で読み味わって感動を聴き手に伝えること。」(練習での読み方を変え、その場でイメージし、イメージしながら「間」をとる)＝「風博士」(坂口安吾)
- ステップ6：「読み手は、読みながら自分の朗読を自分で聴く。どこかおかしいところはないか、自分の声を生で聴いてチェックして、何かあったらその場で自己修正して朗読する。」「朗読はイメージに始まり、イメージに終わる」(聴き手のイメージ) ことの体得＝「蜜柑」(芥川龍之介)

朗読のステップ6を、「教師は、話(指導)しながら自分の話(指導)を自分で聴く。どこかおかしいところはないか、自分の話(指導)を生で聴いてチェックして、何かあったらその場で自己修正して話(指導)す。」と言い換えてみると、教師として目指す指導力のあり方も見えてくる。

朗読の力は、全ての教師に求められるものである。マンガを読むだけでなく、佐倉ハナとともに、朗読のステップをクリアしてみませんか。

